
声と笑顔

ポペ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声と笑顔

【Nコード】

N6290R

【作者名】

ポペ

【あらすじ】

死を受け入れ日々絶望と憂鬱を抱き日々を過ごす彼女。交通事故に遭い体の骨を折り入院している青年。彼女は青年と会い、話、日々に希望と安らぎを少し抱き始める……。

始まり（前書き）

A
w
i
l
l
f
u
l

n
o
v
e
l
の
声
と
笑
顔
が
原
作
で
す
。

始まり

十四年前の雨の日、花菱病院に一台の救急が患者を乗せ来た。看護師も医者も慌て、同伴していた両親の顔も青ざめていた。運ばれてきたのは三歳の少女だった。三歳にしては少し体は小さく、手足は触れただけでも折れるのでは、というほど病的に細い。少女の体は細かく震え、時折びくんと大きく震える。

「先生、娘は！ 娘は大丈夫なんですか！？」

父親が顔を涙で汚しながら聞く。母親も両手で顔を覆っている。

「なんとも言えません。私達も全力を尽くします」

医者が手術室に入り、手術室のランプが点く。

「ああ、なんで、なんであいつが！？」

「貴方……。今は祈りましょう、神様に……」

キリスト教信者の母親は神に祈りを捧げ、父親はただただ地面を睨むだけだった。

数時間後、手術中のランプが消え、中から医者が出て来た。

「先生！ 娘は？ 娘は無事なんですか！？」

「ええ、手術は成功です。だが、まだ峠を越したただけで油断はでき

ません」

「ああああよかった。本当によかった」

「ああ神様。有難うございます……！」

両親は抱き合い、互いの肩に顔を埋め声を出し娘の無事を喜んだ。

数日後、少女が目覚めた。

「おと、うさん。おかあ、さん？」

まだ完全に目覚めてないのか途切れ途切れに両親を呼んだ。

「ああ、ここに居るよ」

「ええ、ここに居るわよ」

娘の問いに答え、娘の左手を父が、右手を母が握り締める。

「笑実^{えみ}、よかった、本当によかった……」

「おとうさん、あかあさん……」

先程より少しはつきりした口調で両親を呼ぶ。

「ここに居るわよ……。今はお休み」

そう言い、母は片手で少女の目を覆った。

「うん……。おやすみなちやい……」

「ああ、お休み」

「ええ、お休み」

数分と待たずに少女は夢の世界に旅たった。

あれから数日後、少女の体調はだんだんと戻って、今ではきちんとした会話もできるようになった。

「笑実、今日は嬉しい報告だ！」

病室に入って来るなり父が言った。

「うれちいほうこく？」

「ああ、嬉しい報告だ！ 母さん、早く！！」

「ええええ、実はね、貴方に弟ができたのよ」

父は子供のようにはしゃぎ、母はゆっくりとかみ締めるように言った。

「おとうとできたのっ？ ほんとう！？」

「ああ、本当だ」

「ええええ、本当ですよ」

「わーいわーい！」

家族三人笑顔に包まれた。

あれから半年、無事出産し、両親は新しい命に歓喜し、少女も喜んだ。

この出来事が少女の人生の歯車を大きく壊し始める。

少女の弟が無事生まれてから両親が少女の病室に来る日が少なくなってきた。

毎日が、三日に一回。三日に一回が、週に一回。そして月に一回。

両親の関心が寝たきりの娘から、生まれてきたばかりで健全な息子へ。さらに、息子が少女のことを怖がり、病室に連れて来ることができなかつたことも理由の一因だ。

両親が少女の病室に来なくなり、十と数年。少女は少女と呼ぶには大人になり、淑女と呼ぶには幼い年になった。

出会い

彼女は一人窓から外を見ていた。彼女が居る病室は個室である。窓から見える景色は患者の心を癒す目的の為、都内では見られないほどの緑が植えられている。初めて見た人がその美しい景色に圧倒されることも珍しくはない。

だが、彼女はこの病院、いや、この病室で十四年暮らしている。この絶景よも言えなくともない景色も彼女にしてみれば当たり前、何の変哲もないただの景色。

「はあ」

ため息を一つ。彼女は一人だ。

彼女を見舞いに来る人は両親が月に一度だけ。彼女には友達がない。外にはもちろん、病内にもいない。かつては病内には居たが皆退院したか、――逝なくなった。

そして、彼女は心を閉ざしていった。両親は月に一度しか会いに来てくれず、親しく友は皆いなくなった。彼女が心を閉ざすには十分過ぎる。さらに言えば看護師も彼女は無口な娘だと思い、彼女と距離を置くようにしている。

「はあー、何時になつたら此処から出られるのかしら……」

彼女が検査以外で口を開くのは久しぶりだった。

声をだしたのはただの気まぐれであり、誰かに返事を求めたわけではない。

「んなこと、ワイに聞かれても知らへんって。それより、あんさん綺麗な声やな！　なんでいつも喋らへんねん！？」

「誰？」

振り向くと開いていた扉から彼女のことを覗き見る青年の姿があった。

十七、八歳であろう青年は百八十センチほどの背丈で、肌は焼けており短髪のいかにもスポーツやってます、という外見だった。しかし、彼の右腕は包帯で巻かれていた。

「あつ、すまんすまん！　ワイは武城スグル。つい先日、車に跳ねられてもつてな！　んで、肋骨数本と右腕が逝つてもつてな！　笑えるやる！？」

「い、いえ……」

「そか？　ワイ的には腹抱えて笑えることやと思うんやけどな？　ま、ええわ！　で、あんさんなんで喋らへんねん？　綺麗な声してはんに」

彼女は少し顔を下に向けて答えた。

「喋る必要がないから……」

「ほな、喋る必要があれば喋るんやな！？」

彼女は青年の言っている言葉の意味を測りかねた。

「どづいづいとっ」

「せやから、ワイが話し掛ければちゃんと答えてくれるゆーことやろ？　ワイ、メツチャ喋るから皆に避けられてんねん……。まー、

シャーないけどな！！　ワイがメツチャ喋るんは生まれつきやからな！！」

「は、はあ」

「なんや、その気いの人らん答えは！　もつとないんか！？　うるさい！　とか、やかましいー！　とか」

「ど、どつちも同じじゃない……」

「おお、せやな！　ワイとしたことが！！」

「ふふふ」

「やあ〜つと笑ったな」

「えっ？」

「いやなに、あんさん何時も暇そーに外ぼーと眺めてはるやる？　笑つてるとこ見たことなかったんよ。まあ、声も聞いたことなかったんやから当たり前言うたら当たり前前やけどな。でも、思った通り綺麗や……。声も笑った顔も……」

青年は気付いていなかった。自分がどんだけ恥ずかしいこと言っているのかを。そして、彼女が顔を赤らめて笑顔になっていたことを……。

「まあ、ええわ！　今日はもう検査の時間やから行くけど明日も来るから話し聞いてやってな〜！」

それだけ言つと青年は彼女の病室の前からいなくなった。

「うん、待ってるよ……」

彼女は、誰にも聞こえない程の小さな声でそういった……。

再開、そして……

青年との出会いは彼女の心を少し変えた。

いつ退院できるかわからない入院生活、心を許せる相手がいない生活。彼女はこんな日々嫌気が、いや、絶望していた、憂鬱だった。だが、昨日青年と出会で彼女の絶望は少し希望の光で照らされ、憂鬱は彼の笑顔で少し晴れた。

実に数年ぶりに何かに期待した日だった。青年が黒色だった彼女の人生に違う色を加えてくれる、と。

そして本当の絶望の始まりの日だった。

「寒崎さん、検査ですよ」

少し間抜けな声が彼女の病室に響く。

「おはようございます」

「はい、おはよ」

この看護師は少し前に花菱病院に来た新人看護師だ。そのせいか彼女に積極的に関わりとうとする。

「今日の調子はどうですか？」

軽口を叩きながら検査の準備をする。

「ええ、今日はいつもより調子が良さそうです」

「あ、あ、ああー！」

突如叫びだした看護師に彼女は少し身をビクつかせた。
看護師は顔に太陽のような笑顔を浮かべ、目は少し潤んでいる。

「私が貴方の担当になって早一月と十二日！ 毎日毎日問いかける私の質問に貴方はいつも無関心そうにいつもと変わりありません、と。けれども私はめげずに毎日毎日質問を繰り返しました！ そしてついに！ 嗚呼、ついに！！ 貴方は心に乗せた言葉を返してくれた！！ 私は今！ 感動しています！！」

彼女は後悔していた。気分が良く、いつもと違う答えをしたらこれだ。

「はあ」

「あらあらため息なんて。幸せが逃げますよ？」

彼女は思った。あんたのせいだ！ と言えたらどんなにすがすがしいかと。

「はい！ 今朝の検査は終わりです。じゃ、また来ますね」

嵐のような人だ、と彼女は思った。

午前中はいつもと同じく朝ごはんを食べ、ゆっくりし終わった。

今彼女は昼ごはんを食べている。もちろん一人で。

「はあ、やっぱり……」

やっぱり来ないか、こう言おうとした。やっぱり青年は来なかつ

たと。やっぱり自分を見捨てたんだと。

「やっぱりなんや？ 悩みなら言うてみいや。ワイが相談に乗ったるで？」

扉の前には昨日の青年が居た。昨日言った通り青年は来た。彼女を見捨てないで。

彼女の涙腺が不意に緩んだ。

「うっ、あ、ああ〜！」

高ぶった感情が彼女の制御下から離れた。

「ぬおっ！？ いったいどうしたんや？ ワイなんかしたか！？
おい、どないしたんや!？」

「うわぁー!！」

青年の問いに答えられる訳がなかった。彼女自身何故泣いているのか分からないのだから。

数分後、泣き止んだ彼女は頬を染めて青年に謝っていた。

「ホントにごめんなさいっ。なんか、ホントごめん!！」

「い、いや、別にええけど……。ホンマにもうダイジョブか？」

「え、ええ。もう大丈夫です」

「そか、ならええ。ほら、さっさと飯食ってしまいい。もう冷めとるかもしれんが」

彼女は言われた通りご飯を食べ直し始めた。だが、しょっぱいとしか感じなかった。

二人の会話

彼女が食事を終え、沈黙が部屋を支配している。

青年は彼女がどのような心境なのか分からないので下手な発言が
できずに沈黙。彼女は先程の失態を恥じて沈黙。この永遠に続きそ
うな沈黙を破つたのはあの（・・・）看護師だった。

「はいはい！ 笑実ちゃん！！ 食器取りにきましたよ〜って
!?!」

彼女は思った。今朝は寒崎さんだったのが笑実ちゃんになってる
と。

「あれ〜、なんでスグルくんがここにいの〜?」

「あ、いや、なんや。昨日ちょっと知り合ってた〜」

「ふ〜ん、そうなんだ〜。まっ、いつか。笑実ちゃん」

「はい、なんですか?」

「三時になったら神田かんだ先生のところに行ってもらえるかな? なんか
話があるみたいよ?」

なんの話だろう、と思ったが二つ返事で

「はい、分かりました」

と答えた。

「それじゃ、私はこれで失礼しますね。あとはお若い二人で。むふふ」

不敵な、いや、不気味な笑みを残して看護師は病室を去った。

「ああ、クソツ！ 絶対あん人勘違いしてはんな！！ ごめんなく、ワイがここにおったせいで変な誤解させてもって……」

「い、いえ……」

青年は少し顔を俯かせて心底申し訳なさそうに言い、彼女は少し顔を赤らめて言った。……今の彼女たちを見たら十人中八人は看護師と同じ誤解をするだろう。

「え〜と、あ、今更やけどあんさんの名前教えてくれへんか？」

青年がこの雰囲気何とかしようとして絞りだした答えがこれだった。

「え、ああ、寒崎笑実です。たぶん表に表札があると思うけど……」

「な、なははは。それもそうやったな」

「ふふ、面白い人」

彼女が小さく笑った瞬間、青年の浮かべている笑みが変わった。愛おしそうに、なにか大切な物を愛でるような優しい笑みに。

「やっぱり、あんさん、笑実さんには笑顔がよお似合う。いつものどこが憂いを帯びているような顔より、どこか悲しそうな顔よりも、

どんな顔よりも笑っている時の顔のほづがええ」

青年は今度こそ気付いた。自分がどんだけ恥ずかしいこと言っているのかを。そして、彼女が優しく微笑んだのを。

「お、あ、ワイ検査あつからまたな〜！」

そう言い残し逃げるよう真っ赤な顔をした青年は去っていった。

「ええ、待ってます」

彼女は昨日と同じように誰にも聞こえない程小さな声でそう言った……。

診断

午後三時、彼女は看護師に言われた通り、彼女の担当医である神田医師の所に居る。

「さて、笑実さん。本当はご両親も一緒のほうがいいのかと思いましたが、色々考えた結果、貴方に先に言います」

医師はただでさえ寄りすぎている眉間の皺をさらに集めた。

「これは事実です。冷静に聞いてくださいね」

医師の長すぎる前置き。それが彼女を不安にしてい

「笑実さん。貴方の病気はおそらく進行しています。詳しく調べてみないと断定はできませんが、可能性は高いです」

「そ、そんな……」

これが、二日前ならば彼女は気にもしなかつただろう。いや、むしろ喜んだかもしれない。これで、絶望を終わらせられると。だが、彼女は出会ってしまった。あの青年に。

「もし、病気が進行していた場合、長くて半年、短いと一月かと……」

なにが、とは医師は言わない。彼女も聞かない。聞くまでもない。彼女の余命だ。

「そん、な……」

彼女の頬に一粒の雫が零れた。そして、次々に零れ、彼女の頬を伝った。

そして検査の結果、彼女の病気が進行していたことが分かった……。

終わり

検査を受け、病気が進行していると分かってから数時間。彼女は病室のベッドの上にあった。

その顔には絶望、そして生への渴望が浮かび上がっていた。

「失礼します」

控えめのノックをし入ってきた女性は、彼女の母だ。

「お医者様から聞きました」

母の顔には同情、哀れみ、そして安堵の表情が窺える。やっと彼女から開放される、と。

「……はい」

「ええ、それでは……」

それだけ言うと母は病室を後にした。

なにか励ますでもなく、事実の確認だけをして。

その日、彼女はなにをすることもなく眠りについた。

翌日、彼女は一筋の涙を流しながら目覚めた。
青年に会いたい、そう強く思いながら。

「笑実ちゃん、起きてる？」

毎朝聞くこの間の抜けた声でさえ聞くと彼女を安心させる。まだ生きてると教えてくれる。

不意に彼女の涙腺が緩み、涙が流れた。

「う、うっ、あぁ〜！」

「あらあら、どうしたの？ 泣かないで。貴方には笑顔のほうが似合うわよ」

看護師は彼女を抱き締め、泣き止むのを待った。

若干十七歳で、死を受け入れることは難しく、実の両親には捨てられていると言っても間違いはない。ましてや、友達もいなく、寂しい日々が青年と出会うことで終わると思った矢先だ。彼女の心は今まで以上に不安定になっていた。

少しして彼女が泣き止んだ。

「笑実ちゃん、大丈夫？」

「ええ、ごめんなさい」

「いいのよ、ご飯ここに置いてくわよ」

彼女は赤く腫れた目を閉じ、礼を言った。

朝食の食器を取りに来たのも、昼食を持ってきたのを別の看護師だった。

朝食も昼食も味はしなかった、そう彼女は思った。

「こんにちは、笑実ちゃん？ どないしたんや？」

昨日とは会った時とは違う雰囲気を出す彼女に青年は違和感を覚えた。

「ううん、なんでもないですよ……」

「嘘や！ なんや、よお分からんけどなんか変やで、あんさん」

「そ、そんなことは……」

「ワイでよかつたらいくらでも相談に乗ったる。せやから話してみんか？」

「……うん」

彼女は話した。自身の病気のこと、家族のこと、友のこと、病気が進行したこと、そして余命僅かなことを。

「そか、大変やな。ワイには笑実ちゃんがどんだけ辛い思いしてきたかわからん、想像もつかん。でも、ワイでよければいつでも会つたる。せやから、せやから泣きなさんなや……」

彼女はまた涙を流していた。声も出さずに。今まで溜めてたてものを吐き出すように、青年に感謝しながら。

「ありがとう」

「礼なんかいらん。ワイがしたいようにしとるだけやからな」

「うん、ありがとう」

彼女は青年に対して今までにない感情を抱き、青年もまた彼女に特別な感情を抱き始めていた。

それから一ヶ月、青年は無事退院したが、毎日病院に通い、彼女と時を共にした。だんだんと彼女の体は細く、小さくなっていった。さらに二ヶ月、彼女は目覚めることのない眠りについた。青年が病院にくる十分前だった。

彼女の顔は優しい微笑みだった。その微笑みを見て、青年は知った。ああ、自分はこの娘に恋していたんだ、と。彼女もまた、自分が青年に抱いていた感情の名前を知らぬまま逝ってしまった。

こうして彼女と青年の物語は幕を閉じた。

終わり（後書き）

終わりです。読んでくださり有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290r/>

声と笑顔

2011年4月6日23時12分発行